

福祉文化通信

～ Well-being への道～

2015.12.28
Vol. 78

●発行者／広報委員会
福田 泰紀・関矢 秀幸
●制作／長瀬 さやか

日本福祉文化学会事務局 〒165-0026 東京都中野区新井 2-12-10 芸術教育研究所内 Tel/Fax : 03-5942-8510 E-mail:fukushibunka@lagoon.ocn.ne.jp



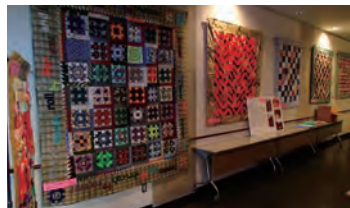
総会の様子

10月24日(土)・25(日)の二日間、兵庫県立美術館および兵庫県福祉センターで、第26回全国大会神戸大会が、大会テーマを「地域文化から福祉をみる—大震災後20年の神戸から—」として開催された。このテーマは、20年前に手探り状態であった復興の軌跡を検証し、それを東日本大震災をはじめとする他の災害にも繋げようとする目的で設定された。

講演やシンポジウムでは、様々な視点から20年の復興の軌跡が語られた。防災教育をテーマにした講演では、防災について、かえって子ども達から教えられたとの報告があった。つまり、災害があるから防災に取り組むというより、守りたい大切な人が地域にいてその人を守るための活動こそが防災であるということに防災教育を通じて気づかされたという報告であった。一方、シンポジウムでは、震災の経験を通して、我々は地域で助け合わなければならないということを知ったが、20年経って神戸の地域は変わったか、助け合いの文化は地域に根付いたかと思える、残念ながら変わっていないと思える、という意見が出された。また、指示待ちボランティアをこしらえていく主体的なボランティアが育っていないところが今のボランティアの

「沖繩福祉文化を考える会」に「福祉文化実践賞」授与
選考委員会委員長 永山 誠

同会は1991年発足、毎月第3土曜日、年間計画にもとづき25年間福祉文化についての研究と実践活動をしてきた。活動の特徴は、地域の歴史をふまえて生活に根差した要望と課題を取り上げて学び、実践し、提案を行う内容である。なお授与式は神戸大会2日目に開催された。



受賞横のキルト展

KOBE 神戸

全国大会神戸大会が無事に終了 大会概要及び感謝の言葉

実行委員長 小坂享子

課題がみられるという指摘がされた。我々は震災復興の教訓を今に活かして切れないというところが確認できたこと、そしてそこから今後の課題がみえたことが本大会の意義であったように思う。

二日間を通して、特別講演、シンポジウム、「人と防災未来センター」見学、懇親会、総会、交流分科会、委員会企画、研究発表が行われ、すべて無事終了した。本学会の全国大会も四半世紀を超えて毎年開催され、歴史の重みを感じるようになってきた。その歴史のなかで、第26回としての神戸大会が一つのステージを担うことができ安堵の気持ちでいっぱいである。参加して下さった皆様、関係者の方々、本当にありがとうございました。

山折り

VI 特別講演2

報告者：大江 緑

あの時高校生だった私が 落語家に—そして一席

阪神淡路大震災当時、高校生だった落語家の桂福丸さんが、東灘区の自宅で経験した地震の瞬間やその直後のこと、数週間過ごした避難所の様子などをお話くださいました。

つらい避難生活の中で、妹さんの笑顔に救われたという経験から、「笑顔の大切さを伝えたい」と落語家になられた福丸さん。

被害の程度によってのいざこざ、大きな被災を免れたものの、避難所や遺体安置所にもなった母校のこと、大人たちの行動や対応の様子を見て感じたことなど、実体験に基づいたお話は心に響き、災害の中で他人とのかかわり方や、自分のあり方などについて考えさせられた。なお、「一席」のお題は「時うどん」であった。

VII 総会報告

日本福祉文化学会事務局 前嶋 元

神戸大会2日目、2015年10月25日(日)午前中「兵庫県福祉センター」において、多くの会員に参加いただき開催された。協議事項として「2014年度事業報告」「2014年度収支決算書及び監査報告」「2016年度事業方針(案)」「2016年度予算書(案)」の説明があり、すべての議案が異議なく承認された。報告事項としては「2015年度第11回福祉文化実践学会賞の選考結果について」「2015年度前期事業報告と後期事業予

定「2015年度予算執行見込み」「会員状況に関する報告」「2016年度第27回大会について」報告。

参加いただいた会員の皆さま、短い時間での協議にご協力いただきありがとうございます。

なお、2016年度第27回大会は東京立正短期大学(東京都杉並区)において2016年10月22日(土)・23日(日)の計画となっている。

会員の皆さまにおいては、日程調整をお願いいたします。

文化の交差点

※会員から福祉文化のルーツを考える視点で占拠します。

デンマーク ボーゲンセでの生活から 福祉文化を考える ②

大澤 澄男 (日本福祉文化学会評議員)

マイナンバー導入とCPR

マイカー、マイハウス、マイナンバー、担当大臣がTVで替え歌をうたったりしている。あなたのためのバラ色の制度導入で、まず国民ひとりひとりに番号を割り振るのだと言っている。導入すれば次々に対象は広がるつもりらしい。正確に「国民総番号制」の言葉を使って、国民にそのプラスとマイナスを説明する姿勢を求めたい。

デンマークではCPR(住民登録+個人登録制)と言われ、国籍によらず観光目的以外で2か月以上居住する人は住民登録をする。1週間位すると「個人登録証明書」のプラスとマイナスが送られてくる。健康保険証も兼ねていて家庭医も決まる。医療、出産、就学、就労、自動車運転免許証、結婚、年金、銀行口座開設、不動産購入、納税などを組み合わせた住民としての社会生活が送れない。

預金の流れや残高、税金滞納状況、不動産所有状況までわかる。住所が変われば5日以内に移転先の市町村への届け出の義務がある。ITによる管理が徹底して運用管理はコミュニケーション(市町村)で国民の信頼は高い。公平で収入隠し、不動産不法取得などできなく、納税も正しく行われる。官公庁は合理化、スリム化、削減され行政効率が高い。住民もインターネットなどを使い役所の窓口へ直接行くことは減っている。合併で作られた役所は水平でバリバリ、以前の権威的な建物とは違い出入りしやすいものになっている。公務員も削減されている。行政と政治への住民の関心は高く、信頼は非常に高い。

現在の日本の現状では個人情報情報がまる裸状態となり、行政や政治が全く信頼出来ない状況が次々と出てくるのを考える。

えると導入に賛同する気にはなれないでいる。適用範囲をどこまで広げようとするのか、プラスとマイナスをも国民に十分説明し、公務員改革と削減の計画も公表することを強く求め、国民投票で決めるくらい取り組みが欲しいと思う。福祉文化の基本は国民主権であり、行政も政治も信頼と相互理解、共通理念などにつながっていかねなければならぬと思うこの頃である。

(今回は2016年3月の発行予定です)



「権の王様」のモバイルデザイン。天井に下げられておく風でうごく。

会員情報

●2015年12月1日までに、ご入会された方のお名前と所属ブロックをお知らせ致します。(敬称略)
小河佳子(北海道)、山田恵子(関東)、安留孝子、住吉加奈恵(中部東海)、岩木秀樹、権原拓也、趙文基、中西久雄、吉村結美、市田響(関西)

●2015年12月1日現在
(会員数)
個人会員 324名、団体会員 8団体

事務局より

山折り

日本福祉文化学会全国大会 神戸大会

第2日目 10月25日(日) 兵庫県福祉センター	第1日目 10月24日(土) 兵庫県立美術館 人と防災未来センター
--------------------------------	--

I 特別講演

報告者：篠原拓也

地域でつくるぼうさい文化—『ぼうさい甲子園』の取り組みから—

地域のみならず一緒に助け合いたいという思いを行動に移すにあたって、住民主体で地域を巻き込んだ様々な取り組みがあること、その意識の高まり、豊かなアイデア、地道な努力の必要などについて多くの学びを頂いた講演であった。

講師であるNPO法人さくらネットの河田のどかさんは報告者と同じ歳(20代!)であるが、驚くほどしっかりと説得的な語りであり、「釜石の奇跡」と呼ばれた成功経験の分析、「ぼうさい甲子園」での取り組みなどの報告の中に、さくらネットの活動への強い思いと誇りが感じられた。地域において人と人が繋がっていくことで形成される「ぼうさい文化」はまさに「福祉文化」に通ずるものであると実感できる講演であった。

II シンポジウム

報告者：北尾亜由子

地域文化から福祉をみる～大震災後20年の神戸から～



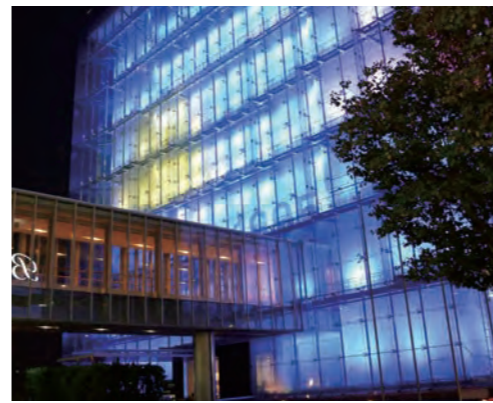
活気みなぎる「おもろい」シンポジウム

コーディネーターの石田さんとシンポジストの村井さん、中村さんは、ボランティア活動を通じて震災以降ずっとお付き合いをされているとの事。あうんの呼吸と、関西人ならではの笑いと活気につつまれた、中身の濃いシンポジウムであった。

震災当時の神戸は本当に深刻な状況だったが、自ら被災しながらも地域で活動され、地域住民の潜在力をぐんぐん引き出し、新たな絆を構築されたシンポジストのお話は圧巻であった。震災の現場を「地域がエンパワーメントされる場所」へと転換されたのと感じた。石田さんの笑顔とお二人のお人柄がにじみ出た、暖かいムードの中で、これからの福祉実践のためのヒントを、たくさんいただいた。

III 「人と防災未来センター」見学

報告者：市田響



神戸大会のプログラムの一貫で久々に訪ねる事が出来た。私自身20年前西宮で被災をしたが1・17シアターでは地震破壊の恐ろしさを再び体感し、震災ホールでは神戸の街が復興に至るまでの映像を眺め、ふと涙が流れてしまった。震災経験のない会員にも貴重な体験となったと思う。復興に至るまでの道程は長く苦しいものだ。だが神戸が震災から根気強く復興したプロセスこそ文化だと感じ、後世に広く伝える必要性を改めて感じた。

I 第1交流分科会

報告者：岡村ヒロ子

地域が育つ 生きる力をつい場が支えきる—とりもどしたあたりまえの最期—



丸尾多重子さんと、まるちゃん、は、「ついで場」を、誰もが集え、しゃべり、泣ける、笑える、学べる、出かける等々まさに「生きる場」だ。という。両親・兄を看取ったまるちゃん、は「ヘルパー講座」の実習で、人を人とも思わない介護の場面に遭遇し、その怒りが「ついで場」誕生の源となった。駅、市役所、社会福祉協議会に近い、そして家賃が安い、それが条件だった。活動は「ついで場」「おでかけタイ」「学びタイ」「見守りタイ」が柱である。分科会ではTV局が「ついで場」を大きく取り上げた。奇しくも生き切ることを支えた「ついで場」を目の当たりにした参加者は深い感銘を受け、「新しい見取りの姿」「地域、個人が育つ大切さ」「本来の介護のあり方」等々、思いのたけをまるちゃんとも共有した。「ついで場」「施設」「我が家」それぞれが「心安らぐ場」に創りあげるのは私達であること学べる場となった。

II 第2交流分科会

報告者：田島栄文

遊びとレクリエーションから見た福祉文化



「楽しむことが出来る」という重要性を語った。その後参加者からの感想や質問を聴き、活発な意見交換がなされた。

本分科会は日本のレクリエーションムーブメントを牽引し実践・研究を進めてきた石田易司さんとマーレー寛子さんを迎え、福祉レクリエーションの未来について参加者と共に考えた。

石田さんからは、1990年代に始めた地域ボランティアを活かした認知症高齢者キャンプや、オーストラリアの障がいがあったても余暇を楽しめる地域社会づくりなど、制度を超えた新しい試みといったレクリエーションが、新しい福祉文化の大切なカギになると提言があった。マーレーさんは、セラピューティックレクリエーションを学ぶため渡米し体験した障がい者・高齢者のキャンプからの学びや、「むべの里」の地域行政と連携した事例など、介護保険制度の中で地域と共に展開できる可能性、

III 第3交流分科会

報告者：脇坂博史

『ともに生きる』をつくり出す地域力 そのパワーの源と展開



大阪府岸和田市「リビングほしかか」代表 原口正彰さんの報告

平成20年、大阪府の福祉事業から「リビングほしかか」を設立。町会各種団体と相互に連携を図り、自助・共助・公助による地域協働型福祉活動の充実発展を進める。

大阪府岸和田市NPO法人「ハートフレンド」代表理事 徳谷章子さんの報告

地域の仮設消防署跡を子ども達の活動拠点として大阪府に要望。2003年開設。「乳幼児親子から高齢者までがつながる福祉の拠点づくり」を推進。

IV 第4交流分科会

報告者：藤原一秀

災害と福祉文化—1.17 あの日から始まったこと



20年目の1・17を間近にした神戸。あの日から今日までの阪神間の出来事を、3人のパネラーに語ってもらった。

保育園園長の池川正也さんは、市役所近くの保育所での公務員の保護者の動きを中心に子どもの暮らしを、養護学校の教員だった福井喜章さんは、災害時の障がい児たちの困難とその後の特別支援教育を、当時災害ボランティア支援団体のスタッフで現在大学職員の新井博さんからは、緊急時の災害ボランティアの活動と大学ができる災害支援の可能性を語っていた。

表面的には短期間で成し遂げられたように見える神戸の復興と多様な住民の幸せが必ずしも一致していないという話が印象的であった。

V 第5交流分科会 委員会企画

報告者：川北典子

地域で子どもを育むということ



パネリストに未まり子さん(子育ての文化研究所代表・NPO法人山科醍醐こどもひろば元理事長)を迎え、その活動の報告を中心に、地域での子育てをめぐる現状について意見や情報を交わした。

伝統的な子育ての文化の良いところを、現代の社会のなかで子育て中の世代にどのように伝えていけばよいのか、また、子育て支援に携わる者に必要な配慮とは何かなど、実例に基づいた説明を聞き、考えを深めることができた。

参加者は少なかつたが、その分、オープンな話し合いができて有意義な時間を持つことができた。